

6回の存続の危機を乗り越え 何があってもこの土地で生き延びる NECCPC(株)米沢事業場『工場史』(有斐閣)

NECパーソナルコンピュータ(株)米沢事業場のスタートは1944年、太平洋戦争末期の国策による、東北金属工業(株)の諏訪工場からの疎開工場でした。終戦で軍需が減り、500人いた従業員が100人に減り、「米沢工場」は最初に存続の危機となります。



藤本隆宏編『工場史』有斐閣(2024・6・28)

そこから、米沢工場の生き残りをかけた自主努力が始まります。しかし本社は、1951年に、合理化と効率化を図るため、本社諏訪工場や仙台へ集約化が提案され、工場閉鎖の2回目の危機を迎えます。

当時120人いた従業員が、仙台に移転するか、退職して別の会社に移るしかない状況となりました。運営者は、東北金属からの分離独立を選択し、新たな会社、(株)米沢製作所が誕生します。

新会社は資本金315万円で、日本電気(株)と東北金属工業(株)、米沢製作所従業員が等しく株主となります。新会社設立後も、仕事が足りないという苦労が続く、「何でもつくりまします」というダボハゼ型事業展開で、日本電気の技術支援を受け、通信機器部品の導入が図られます。

1957年から、初めて新卒者30余名が採用され、大学卒の技術者を親会社の日本電気に送り、生産技術や現場実習を受けさせます。「技術者を本社の資源を活用して育成する」という独自戦略は、その後も続きます。

当時の事業戦略は、徹底した「下請け受注」で、どこにでも仕事を取りに行くという「攻める下請け」でした。1960年の「所得倍増計画」で、家庭電化ブームが始まり、主力のマグネットは量産化が成功。テレビメーカー各社の需要が急増します。

建築ブームに対応した高性能エレベーターと高品位リレー開発で、日立製作所の受注も急増します。1974年に日本電気からファックスの組み立てを受注し、これが「米沢工場」を救うこととなりました。

1977年からPC端末装置の製造も始まり、本社に技術習得のための要員派遣を行いながら、軌道に乗せま

ずります。この時の派遣が、本格的なPC開発に繋がります。

オイルショック

しかし、1973年のオイルショックによる不況で、受注が激減し、希望退職を2度147人も募り、3回目の危機を迎えます。不況下でも、「技術者を本社の資源を活用して育成する」戦略は継続され、余剰人員対策として、新しい事業を模索するため、日本電気の各事業場へ社員を派遣します。

1974年から日本電気からファックスの組み立てを受注し、これが「米沢工場」を救うこととなりました。

1977年からPC端末装置の製造も始まり、本社に技術習得のための要員派遣を行いながら、軌道に乗せま

ふるさと賛歌

鈴木重雄(八色木)

幼い頃の遊び唄 5 による、大正・昭和初期の幼い頃の遊び唄⑤
八色木の日向富さん

おっさーらい
おひとつ おひとつ おひとつ おひとつ
わろして おっさーらい
おふたつ おふたつ おろして おっさーらい
おんみつ おひとつ おろして おっさーらい
おんよつ(おんみな) おろして おっさーらい
お手あげ
わろして おっさーらい

おはさみ
おろして おっさーらい
おちりん
ざーり
中切つて つまよせ
けいすけ しょうすけ おっさーらい
おんじよな
わろして おっさーらい
さらりと かんざよ

ひろく
お手ぶし
おたもと
おたなま
たなつて ひろつて まーいて
ま青山のこた
かえして おっさーらい
おばさま
おろして おっさーらい

とさきは(一回)しとさきは... 四回まで
おっさーらい
おと山一回 おと山二回 五回まで
親残し
後向きになって手の中にかくし。周りの人にあてさせる。

した。長らく続いた「下請け仕事」からの脱却を図るため、1982年から「自社製品開発時代」が始まります。最初にカラープリン

タの開発、そしてイメージスキャナやパソコンを次々と商品化し、プリンタヘッドの生産は急激な勢いで伸びました。(次ページへつづく)

（前ページからつづく）

1990年に、ファクシミリ事業を全て、親会社の日本電気に移管するとされ、4回目の危機を迎えます。

しかし、親会社やグループ会社とは競争せず、技術や人材育成は親会社の資源を活用する戦略で、1985年からノートPCの開発を担当してきたことが、最大の進化を後押ししました。

米沢工場の開発したノートPCのバーサは、1993年に世界シェアで第3位となり、本社NECの赤字が解消されたと言います。

1997年には、米沢工場は山形県内で工業出荷額トップ、東北でも第2位となりました。

しかし、2001年に5回目の危機を迎えます。

NECグループの再編で、NEC群馬とNEC静岡の拠点軸争いとなります。

この危機で、米沢工場は生産現場の革新的改善に着手します。

先進的ITの活用は

全国的に有名になり、

「見せる工場」で「マール秘」がない工場見学は、引きも切らない状況となり、常に見られていることが、一人ひとりの能力向上につながったと言います。

6回目の危機は、親会社NECの戦略転換で、中国系企業レノボの傘下に入る決定です。米沢でのPC製造が守れるか。レノボのラビン会長

が米沢工場に何度も足を運び、「毎回驚きだ。改善の連続だ。米沢事業所の文化は優れている」と言わしめた評価です。

なぜ「米沢工場」は生き残れたのか。「何があっても、この土地で生き延びるといふ強い意思があった。その時々、挑戦し続けた人々がいた。」それが第一の成功要因と言います。

東田川史跡物語 島野嘉作 教師を認めず

青山 崇

『稲作改良碑』を見てみよう。

郡内は古来から土地は肥え、農民は一応豊かであった。それで水田のみに頼り、他の農法は考えもしない。乾田は収穫も多いのに、田は収穫も多いのに、あれこれ言って取り組もうとしない。

折田県令が各郡から2名、庄内3郡で6名の篤農家（力田者）を福岡に派遣し研修させたが、「民不悦事遂廃」

動けば変わる 意見・要求を 政治へ

政権与党が過半数割れとなって、国民の要求が通る可能性が開かれました。市政も同様に、声をあげれば変わります。体育館のトイレが壊れたままなど、意見・要求をお寄せください。

私の意見・私の要求

氏名 連絡先 切り抜いて、共産党市議団や民報配布者にお渡しください

けになる必死の指導であった。

乾田馬耕だけでなく、石碑題目のごとく稲作改良全般、種籾選・鋤草・堆肥・驅虫などについての講話をし実施した。

しかし農民は信用せず、南国の農法で種々のことを、風土が違う北国でやろうとするが、何も知らないこと甚だしい。これをやれば全郡荒地になってしまう。とまで言った。

このような文は、ほかにみられる。郡農



金10000円の定期

先日、郵便局の窓口で困ったことが起きた。ま〜皆さん、この事、聞いてくれちゃ。

▲実はある日、年金制度が悪くなることに抵抗する団体名義の通帳を作りたく、郵便局に行つたんだ。その規約・会員名簿など必要だと思ふ書類を持って。ところが、この規約では許可は出ないだろうとの事。そうでなくても許可までは一ヶ月位掛かると言うんだ。

▲それじゃ俺の通帳を空にしてそれさ使うか、という事で全額払い戻しにすることにした。しかし通帳の残高に33円の端数があった。機械には、硬貨が必要な場合料金がかかります・と出ていた。手数料は1枚から25枚まで税込み110円だ。1円でも下ろせば110円取られる。33円はお札

会の文である。法令上正式な団体としての公認は明治32年農会法によるが、それ以前は任意団体として、県・郡・市町村などにつくられていた。庄内でも幾つかあり、そこで作られた文が基本になっているようだ。



島野嘉作

郡長室に掲示肖像画

で貰えないので、当然硬貨が出てきた。そして110円を税込みで引いたと書いてある。

▲これにはまだ続きがあるんだ。その110円はマイナスでの記入だ。このマイナスはこの通帳の定期預金からの借金だという。俺は郵便局さ定期した覚えはないと言ったら、通帳の裏側に覚えのない定期預金を書いてあると見せたんだ。その額や金10000円なりと。

▲普通、定期預金と言えは額が大きくなって、しばらく使う予定がない場合つくるものでしよう。誰が金10000円なりで定期を組むものか、バカな。という事で、「ゆうちょ銀行では、通常貯金の残高を超える払戻しがあったときに、その不足分が自動的に貸し付けられます」とのことだ。勝手に定期預金と借金がつかられ、その借金の金利は年14・0%もするという。(石川)